

津山の城下町での自然の脅威といえは、まず洪水があげられます。壮大な津山城の築城とともに進められた城下町建設。その中で城下町を洪水から守る堤防の建設は、欠かすことのできない重要な課題でした。

しかし、このようにして築かれた堤防も長い年月の間には、水流によって壊されてしまう恐れがあります。そこで、堤防に当たる水流の力を分散させたり、流れを制御したりするための工夫がなされました。その1つが、当時の一般的な言葉では水剝みずはら、現在では水制とか沈床しんじょうと呼ばれる、堤防から川の中に張り出した構築物でした。

この構築物は、地域によって形や工法も異なり、また呼び名も様々ですが、江戸時代の津山では「なげ」と呼ばれていました。このなげが最初に造られた時期は確定できませんが、津山郷土博物館に所蔵している城下町の絵図資料からは、少なくとも森時代の終わりごろにはあったことがわかります。

津山の「なげ」は、吉井川の北岸堤防から突き出して設けられた、少しとがった山椒魚さんしょうぎょの頭のような、あるいは先が丸くつぶれたかまぼこのような形をした大きな石組みでした。なげとなげの間隔は様々で一定ではありませんが、なげの近辺には緩やかな流れのよどみができるので、堤防から下る雁木かりがき（石段）が設けられたり、船着き場に利用されたりすることもありました。

しかし、江戸時代にはこのような形のものばかりではなく「わくなげ」と呼ばれるものもありました。それは、なげを設置したい場所を多数の杭で囲って、その中に石などを投げ込んだものでした。その目的や、同じような効果が得られたのか

津山城百聞録

～吉井川の「なげ」～

どうかは不明ですが、大きさや形が自由に設定できる利点があります。

ただ、こうした大切ななげも、その維持管理はたいへんだったようです。一例をあげれば、東新町と西新町の南には、吉井川の土手までの間に八出村の田畑がありました。これが村と町との境界をあいまいにすることとなったため、土手の石垣やなげの管理をどちらがするかで問題となったことがありました。なげの管理には、日常的な掃除などの管理だけではなく、場合によっては行き倒れ人の対処まであるので、双方とも相手の管理を主張して争い、藩の役人の裁許を仰ぐこともあったのです。

ともあれ、堤防とともに400年にわたって城下町を守ってきたなげも、護岸工事によりほとんどがその姿を消してしまい、現在ではわずかに、安岡町から二宮にかけての堤防に残されるのみとなり、なげという言葉も失われつつあります。

ちなみに、神伝流泳法で知られる大洲（愛媛県）では昔からなげと呼んでいて、現在でも、なげという言葉が使われているそうです。



▲小田中で確認される「なげ」

8月中のひとの動き

人口	111,477人(前月比+40)
男	53,206人(同+19)
女	58,271人(同+21)
世帯	42,884世帯(同+67)
転入	290人
転出	273人
出生	95人
死亡	72人

(9月1日現在)

PRINTED WITH SOY INK
R100
広報つやまは、環境保護のため古紙配合率100%再生紙、大豆油インキを使用しています。読み終えた後はリサイクルにご協力ください

つぶやき

編集室

出ましたよ！ロックコンサート。いい年して往年のロックを披露させていただきます。息切れの早さにはシヨック。いつまで続くことやら。でも一番心配なのはあのゴウ音の中でノリノリだった子どもたちの体への影響。(X)

ペンネーム(鉄)は、鉄道マニアの別称。バスマニアでもある私が今回の特集担当。みなさんは津山から鳥取へ路線バスで直行できることをご存知ですか。バスでのんびり揺られると心は穏やかに。もちろん鉄道も。(鉄)

行楽の秋、芸術の秋、読書の秋、食欲の秋、スポーツの秋…。今月号の「つやまごよみ」を見てみると、遠出をしなくてもいるんな秋が市内で十分楽しめますよ。仕事にも遊びにも体が2つ欲しいところです。(e)

つやま 広報

10月



編集・発行

津山市企画部行政広報室(市役所3階)
〒708-8501 岡山県津山市山北520番地
☎0868-23-2111(代) ☎0868-32-2152
Eメール kouhou@city.tsuyama.okayama.jp
☆広報つやまはホームページで閲覧できます
<http://www.city.tsuyama.okayama.jp/>

発行日 毎月10日

印刷 株式会社 津山朝日新聞社印刷部